宋代河西チベット族と佛教

岩崎力

一　はじめに
二　西涼府政權と佛教
三　唃厮囉の登場と蕃僧の擡頭
四　蕃僧政權の展開
五　佛教信仰の諸様相
六　宋の佛教利用政策
七　おわりに

一　はじめに

チベット佛教の偉大な改革者ツォンカパ Tsoṅ-kha-pa（一三五七―一四一九）はツォンカ地方の出身である。ツォンカパとはツォンカの人という意味にほかならない。青海省最大の寺院塔爾寺は、まさにツォンカパ誕生の地に建立されたことで知られている。(1) この地方は民國時代になってもチベット佛教の一中心地として繁榮した。しかし、歴史をさかのぼるとツォンカパが誕生するはるか以前から、佛教はこの地方に深く根をおろしていたことがわかる。北宋時代、この地方を舞臺に活躍していた河西チベット族こそ、その後の佛教信仰の基礎を作った人々であったのである。彼らの信仰を宋史には

端的に「尊釋氏」[2]と記している。おそらく攝取期にあった西夏佛教にも、少なからぬ影響を與えたであろう[3]河西チベット族の佛教信仰とはいかなるものであったのか。もとより核心に觸れる史料が缺如しているため、どれほどその實態にせまることができるのか、はなはだ疑問であるが、以下、河西チベット族と佛教のかかわりについて論じてみたい。

二　西涼府政權と佛教

五代・宋初の河西チベット族の中心は西涼府（涼州）にあった。後漢の隱帝のころ、吐蕃の土豪折逋氏が主權を掌握し、嘉施、阿喩丹、遊龍鉢の三代およそ五〇年間の西涼府支配が行なわれた。さらに咸平四年になると折逋氏にかわって吐蕃の名族 rLans 氏の後裔、潘羅支が平和裡に政權を獲得する。そして宋は彼に西涼府六谷大首領の地位を與え、李繼遷牽制の一大勢力に仕立てあげたのである。潘羅支の死後は弟の厮鐸督に政權が繼承されるが、兄弟あわせて約一五年間の西涼府支配が行なわれた。以上の西涼府政權の推移については、私が以前に論じたところである。[4]

ところで、五代・宋初の西涼府の住民が佛教に對し熱心な信仰心を持っていたことは、宋史吐蕃傳に年代の特定はできないが、

その州帥やや民情を失う。すなわち衆皆嘯聚す。城内に七級の木浮圖あり。その帥これに急登し、その衆に紿って曰く「爾もし我に迫まれば、我すなわち自ら此に焚せん」と。衆、浮圖を惜み、すなわち盟いてこれを舍す。[5]

とあることからもよくわかる。民衆が佛塔の燒亡を防ぐため、不本意ながら州長官の非を許しているのである。當時の西涼府の人口は咸平元年（九九八）十一月の數字であるが、宋會要西涼府に折逋遊龍鉢の上言として

戸は二萬五千六百九十三、口は十二萬八千一百九十二。今、漢民三百戸あり。

とある。十二萬八千餘人のうち漢人はきわめて少數しか記されていないところから、かなりの部分がチベット系の人々で占められていたと思われる。すなわち西涼府居住のチベット人の社會に、佛教はこの時代まったく定着していたと考えら

れる。はじめてチベット族の政權を樹立した折逋嘉施に關し、宋史吐蕃傳に、

乾德四年、知西涼府折逋葛支（嘉施）上言す、「回鶻二百餘人、漢僧六十餘人あり、朔方の路より來り部落に劫略せらる。僧いわく『天竺に往き經を取らんと欲す』と。並びに甘州に送達し訖る」と。詔してこれに褒答す。(6)

という記事をのせている。この史料には前田正名氏も注目し、西域交通路の面から扱っているが、(7)當時、漢人西域求法僧が多く涼州を經由して敦煌に赴いていたことは、最近の土肥義和氏の論文にも記されている。(8)私としては、この史料は政權を掌握しておよそ一四、五年を經、知西涼府を許された折逋嘉施が、太祖の佛教保護策に迎合した姿をあらわしている材料として利用したい。自己の佛教、僧侶に對する態度を表明することにより、授官に對する謝意を示したのであろう。

さらに、折逋氏三代目の遊龍鉢に關して、宋會要西涼府にさきの記事に續けて、

六日、詔して〔遊〕龍鉢を以て安遠大將軍と爲す。遊龍鉢、崇政殿に詣り恩を謝す。因て言う、「本土、浮圖を造るも黄金・五彩の裝飾乏し」と。令しておのおのこれを賜う。

とある。佛塔の建立を理由に賜物を強要したともとれるが、後述する潘羅支、厮鐸督の例からも、遊龍鉢が佛塔を新たに建立しようとしたことは事實であろう。拙稿でも觸れたように、このころ、遊龍鉢は折平族首領握散と六谷蕃部の歸屬をめぐって對立している最中であった。(9)安遠大將軍の授官も、遊龍鉢が西涼府の主權掌握を一應宋に認めてもらった證明である。そして同時に、佛塔建立を行なうことでチベット系が多數を占め、さらにほとんどが佛教徒である西涼府住民の宗教的指導者、すなわち大檀越としての地位を宋に對して明確に示したものと思われる。遊龍鉢が建立しようとした佛塔がどこの寺院のものであったかはわからないが、宋史吐蕃傳景德元年の條に、潘羅支の使者邦逋支の言として、

また言う、「洪元、大雲寺を修せん」と。詔して金箔物綵を賜う。

という記事がある。當時、西涼府には洪元寺、大雲寺の二寺院が存在し、それぞれ修理を要する狀態にあったことがわかる。遊龍鉢の建立しようとした佛塔もこれら二寺院のいずれかに、おそらくは洪元寺の修復と關連しているものと思われ

る。というのは、洪元寺に關しては、宋史に對應する宋會要西涼府景德元年正月の條に特に、

潘羅支また言う、「洪元寺壞す。工匠を給し、および金碧絹綵を賜り、これを修繕せんことを乞う」と。詔して、以てなおまさに工匠はこばむに遠去を以てす。餘はその請に從う。

と記しており、遊龍鉢から政權を繼承して三年目になる潘羅支が、その修繕について宋に工匠の派遣と金碧・絹綵等の賜物を要請している。宋は遠方を理由に工匠の派遣は斷ったが賜物を與えており、潘羅支の要請に應じている。工匠の派遣を要求している點からも、洪元寺の修繕がただ賜物を目的にしたものでなかったことがよくわかる。洪元寺の修繕は潘羅支の代だけでは完成せず、さらに弟の厮鐸督に受け繼がれている。宋會要西涼府景德二年の條に、潘羅支の横死後、政權を繼承したばかりの厮鐸督の要請として、

時に、厮鐸督また馬を貢ぎ金綵に易え、洪元佛寺を修せんことを求む。詔して、求むる所の如くにこれを賜い、その馬直を還す。

とある。このように、二代におよぶ西涼府の主權者が洪元寺の修復に力を注いだところから判斷すると、遊龍鉢の建立しようとした佛塔も洪元寺に關係するものと考えてよかろう。おそらく洪元寺は唐以前からの名刹であったと思われ、西涼府の住民が最も多く歸依した、いわば西涼府佛敎の大本山であったと考えられる。それ故、西涼府政權の主權者にとっても、洪元寺の修復には特別の意味がこめられていたのである。つまり民衆に對し、西涼府佛敎の保護者としての立場を誇示することにより、その統治の安定をはかったのであろう。

ついで、潘羅支が洪元寺とともに修繕の資を宋に求めた大雲寺は現在にまで續く古刹であり、その境内に西夏感應塔碑が[10]あることは周知の事實である。五涼考治六德集全誌第一[11]卷智集、武威縣志の卷一寺觀の項に合計三七寺を記載するなかに、

大雲寺　東北隅、塔あり、晉の張天錫建つ。

とある。張天錫とは五胡十六國の前涼九代の主である。到底その時代の佛塔が清代に殘っているとは考えられないが、こ

れらの記述から、大雲寺も唐以前からの歴史を持った寺院であることがわかり、當時も人々の信仰を得、また西涼府主權者からは洪元寺同様特別に扱われていたのであろう。(12)

そこでつぎに、佛教勢力が西涼府政權のもとでどのような位置にあったのか、考えてみたい。チベット系政權の確立される以前の話であるが、舊五代史卷一三八外國列傳二吐蕃に、

唐長興四年、涼州留後孫超、大將拓拔承謙及び僧・道士、耆老楊通信等を遣わして京師に至らしむ。明宗、孫超を節度使に拜す。

とあり、早くから僧侶が政治的な活動に關與していたことがわかる。その後、折逋氏政權から潘羅支政權にかけては、僧侶のめだった活動はなく、宋への遣使などにも僧侶の名は一切記されていない。ところが、厮鐸督政權になると俄然、僧侶の活動が目につくようになるのである。宋會要西涼府に、

大中祥符元年六月、西涼府進奉僧法滿に紫方袍を賜う。

とあり、四年の條にも、

十月、厮鐸督、僧蘭氊單を遣わし來貢す。紫方袍を賜う。(13)

とあり、さらに八年の條にも、

七月、西涼府僧驚訛失羅來朝す。紫方袍を賜う。

とある。宋代、紫衣師號の制がみだれ、財政難を補うためさかんに賣與されたことはよく知られている。(14) 對異民族に關しては、それが特に綏撫の目的で使われ、その對象となる僧侶がいわゆる名僧、知識であるか否かに拘らず、當該政權と宋との關係に應じて、その求めに從って與えられたもののようである。三年おきに三名の僧侶が紫方袍（いわゆる紫の袈裟）を與えられるということは、厮鐸督の崇佛政策のあらわれととることもできるが、事實は政權内部にこれら僧侶が深く關與していた證據である。すでに佛教勢力の歸趨が厮鐸督時代においては、政權の行方を左右するまでに成長していたこと

を物語っているのであろう。[15] この考えをさらに補強するのが、すでに厮鐸督時代になると僧侶によって支配される蕃部があったらしいということである。その證左は宋會要西涼府景德四年の條に、

四年五月、厮鐸督兵を遣わす。六谷十八首領蘭逋赤等來りて朝貢す。かつ朝廷の優卹を感ずるを言う。

とあるなかの蘭逋赤にある。後に詳しく述べるが、蘭逋赤とはチベット語の活佛を意味する rin-po che の對音と思われるからである。當時の西涼府政權の構造は厮鐸督の直轄部族である者龍七族と、政權を支える六谷十八蕃部から成りたっていたことは、すでに述べたところである。[16] その六谷蕃部を代表する部族が僧侶によって支配されていたらしいのである。もちろんこれは、一介の僧職から身をおこして政治的權力を掌握するまでになった僧侶がいたことを意味するものではない。蕃酋、あるいはこれに連なる世俗勢力が、佛教信仰の隆盛に應じ寺院勢力を取り込み、その宗教的權威をも身にまとうようになった姿を示しているのであろう。これについては後に詳述する。ともあれ、厮鐸督時代になると、その政權の中樞部にも、そして蕃部のなかにも佛教勢力の擡頭が著しくなり、まさに次代のチベット族政權の原型をかたちづくっていったことがわかるのである。

最後に西涼府時代の佛教の内容であるが、地理的にみて西涼府が河西回廊上に位置し、中原と敦煌、西域を結ぶ交通路の要衝にあたっているところから、早くから中國佛教の影響と、それ以上に敦煌佛教の影響を強く受けていたと考えられる。唐代、敦煌がチベットに占領されていた時期も、歸義軍時代も、敦煌佛教はチベット佛教の影響を受けつつも、禪を中心に繁榮を誇っていた。[17] そして五代・宋初のころはいわゆるチベット佛教の再興運動の直前にあたっており、西涼府においては敦煌佛教の影響とチベット佛教の影響とが混在していた時期とみてよいのではなかろうか。厮鐸督の遣使した僧も一名は漢名法滿を名のっており、他の二名は明らかにチベット人である。この點からも、西涼府の佛教は歴史的にも、地理的にも唃厮囉登場以降の河西チベット族の佛教信仰に比較して、中國的要素がかなり強かったと思われる。

三　唃厮囉の登場と蕃僧の擡頭

西涼府をのぞくと、河西チベット族の居住地域は大きく二つにわけられる。一つは黄河上流域で、湟水流域から黄河を隔てて洮河流域にかけての、かつての吐谷渾の故地にあたる部分である。いま一つは黄河最大の支流、渭水の上、中流域の北側、六盤山脈をとりまくその周邊一帶である。吐蕃支配時代は前者が、とりわけ湟水流域が最も政治的比重の重い地域であった。この地方は唐代すでにツォンカ Tsoṅ-kha と稱され、中央チベットの大尚論 zhang blon ched po が涼州などとともに、この地でも河西方面全體の「大軍團議會」を催したこともあったらしい。(18) ツォンカ地方の住民も唐代には佛教に充分なじんでいたようであり、當然、吐蕃の河西支配期には敦煌の佛教とも關係があったと考えられる。山口瑞鳳博士によれば、敦煌を攻略したチベットの將軍シャン＝ティスムジェ＝マルウ zhang khṅi sum rje mar bu の歸依を得ていたメン和尚 Man hva chan という人物が八世紀の末ごろ、ツォンカ地方に赴いて弟子を育てたとされる。(19) またメン和尚の弟子のナムカー＝ニンポは吐蕃本土から青海方面に至ってメン和尚に師事したとのことである。(20) なお、沖本克巳氏によれば、メン和尚は有名なサムイェー宗論で敗れた摩訶衍である可能性が強いとされる。(21) また、R・A・スタン氏によれば、ランダルマを殺害した僧は黄河南方の循化の近邊に逃れたとされ、以後もこの地方に逃亡した僧侶の例を記している。(22) これらの事例は、ツォンカ地方が、かなり早くから佛教の一中心地として繁榮していたことを物語っているのであろう。なお、土肥義和氏によれば五代、西川（四川成都）佛教界と敦煌、西域の佛教は密接な交流を持っており、そのルートが廓州から鄯州を經由するものであったとされる。(23) おそらく唐末から五代に至るころも、ツォンカ地方は敦煌や直接チベットの佛教界と交渉を持ちつづけ、地理的にみても多分に西涼府以上にチベット的要素の濃い佛教を奉じていたのではないかと思われる。そして宋代になるころには、ツォンカ地方から洮河流域の河西チベット族の佛教信仰は、チベット本土の佛教再興運動に對應してますます盛んになったのであろう。

さきにも述べたように、すでに十一世紀に入るころから、政權にかかわりを持つ僧侶の姿が目につくようになってきたが、いわゆる宗哥城唃厮囉政權[24]が誕生する前後になると、その政治的な活動は一段と活發になってくる。その範圍もツォンカ地方に限られたものではなく、渭水上流域においても、部族を率いる蕃僧の活躍が顯著になってくるのである。當時、宋は名將曹瑋をして西北沿邊一帶の蕃部經略を行なっている最中であり[25]、蕃僧の動きもこれに關連したものであることはいうまでもない。まず長編卷八四大中祥符八年二月壬戌の條に、

（曹）瑋また言う、「涇原界掌事蕃僧哩碩琳布齊等四人、紫方袍・師號を賜らんことを乞う」と。詔してその請に從う。

とあるのが關心をひく。このころ曹瑋は涇原路鈐轄も兼ね、沿邊經略の一環として原州方面の經營にも意をそそいでいた。大中祥符六年には弓箭手を設置し、翌七年には原州の熟戸の招撫を行ない、百帳以上を管する大首領を本族軍主に補し、以下、指揮使、副指揮使等に補任し、この方面の熟戸の軍事力の組織化をはかっていた[26]。そして右史料の哩碩琳布齊等は「涇原界掌事蕃僧」とあるところから、おそらく各部落の首領たちの上に君臨する、この地方の政教兩權力を掌握した存在だったのであろう。琳布齊とはチベット語のリンポチェ rin-po che の對音にほかならず、この稱號は後に述べる唃厮囉を擁立した李遵も名のっている。現在ではダライラマ、パンチェンラマ等、轉生をともなう、いわゆる活佛の意に使われる場合が多いが[27]、すでに十一世紀には河西チベット族の社會で一般の蕃僧とはその性格を異にする存在として、尊ばれていたようである。宋が哩碩琳布齊等四名に紫方袍と大師號[28]までも授與していることは、彼らが涇原界熟戸におよぼす宗教的權威が非常に強かったことの證明であり、また同時に涇原路一帶のチベット族の佛教信仰がきわめて盛んであったことを示しているといえよう。ともかく、この時期、涇原路一帶のチベット族は四名の蕃僧によって統率されていたことは確實であり、宋の彼らへの處遇は、まさに曹瑋の涇原路經略の仕上げ作業にほかならなかったのである。

ところで、李遵たち宗哥族の蕃酋が唃厮囉を廓州に擁立したのも、まさしく大中祥符八年二月ごろのことであった。こ

れ以後、李遵の獨裁化が進み、宗哥城唃厮囉政權の成立をみ、同年秋には早くも一連の秦州蕃部に對する攻勢が開始される。一方、これに對し同年九月、宋も符節を合わせたかのように、張佶の失政のあとの秦州經營を曹瑋に委ね、秦州蕃部の羈服にあたらせたのである。これら蕃部の歸屬をめぐる宋・宗哥の爭奪戰については、すでに別稿で詳しく論じたところだが、[29] 曹瑋の周到な蕃部經營が功を奏し、宗哥側の完敗に終る。ところが、この對立を子細に檢討すると、秦州方面において蕃僧の政治的な活動が顯著に浮かびあがってくるのである。長編卷八八大中祥符九年九月丁未の條に、

渭州（古渭州の誤）吹莽城帳（張の誤）族都首領張碩噶（小哥）を以て順州刺史となす。大首領雅克沁等五人、並びに本族軍主となす。秦州永寧、小洛門、威遠寨大首領四十七人並びに軍主に補し檢校官を加う。階勳みなその內附を奬するなり。碩噶、兵を以て裕木扎卜沁を破るを助く。故に加等を命ず。

という記述があるが、裕木扎卜沁については同割注に「……二賊はみな埒克遵（李遵）の鄕導」と說明し、さらに長編卷九一天禧二年夏四月の條に、

己卯、曹瑋言う、「蕃僧裕木扎卜沁さきに故渭州吹莽城に衆を聚め文法を立つ。今悉くすでに破散す……。」[30]

とあるように、彼は宗哥城政權の獨裁者李遵の配下の蕃僧として、古渭州吹莽城に一時的にではあるが、文法をたて、宗哥城政權の據點を作った人物である。裕木扎卜沁が宗哥城から派遣されてきたのか、吹莽城を本據とする蕃酋の出であったのかは不明だが、渭州上流域の河西チベット族の佛敎信仰を利用して、唃厮囉をいただく李遵獨裁の佛敎政權の側にみずからの身をおき、蕃部支配をめざしたことにはちがいはない。裕木扎卜沁の吹莽城支配も天禧二年になると、同地の張族都首領張小哥らの攻擊で完全な失敗に終るが、[31] 實はその攻擊にもこの地方の有力な蕃僧の力がかなり關與していたらしいのである。長編卷九三天禧三年春正月丁卯の條に、

秦州永寧寨蕃僧策淩班珠爾、伊朗頗斡の二人に紫衣を賜う。部署曹瑋の、その屢しば指使を經るを言うを以ての故なり。

とある。前記九年の條には秦州永寧寨の大首領も軍主の地位に補せられている。ここでさらに蕃僧の策淩班珠爾と伊朗頗

斡が「しばしば指使を經る」を理由に紫衣を賜っていることは、彼らが大首領とともに永寧寨の蕃部を支配していた證據であり、唃厮囉の權威を利用した裕木扎卜沁には從わない佛教勢力が、永寧寨に存在していたことをあらわしている。こうした狀況は永寧寨にかぎった例ではなく、長編卷九六天禧四年十二月己丑の條に、

故秦州蕃僧努卜諾爾の弟子莽布瑪喇斡に紫衣を賜う。本州鈐轄の、その斡事を言うを以ての故なり。

とあるように、秦州においても同樣の狀況が展開していたようである。このころ秦州はすでに曹瑋の徹底した經略により完全にその統治のもとにおかれていたが、[32] 蕃僧の故努卜諾爾は秦州蕃部の佛教信仰の中心的僧侶であったと思われる。その弟子の莽布瑪喇斡が「その斡事」の故をもって紫衣を賜ったことは、具體的には佛教徒である秦州蕃部をよくおさめて、裕木扎卜沁の工作に蕃部を從わせなかったことを賞し、故努卜諾爾の後繼者としての地位を宋が承認したことを物語っているのであろう。ともかく、この時期、秦州方面の蕃部は曹瑋の經略よろしきを得て完全に宋に服從していたのである。そのため、唃厮囉の宗教的權威を利用し、蕃部の佛教信仰に訴えようとする宗哥城政權の搦め手からの工作も、信仰面においても宗哥城政權とは一線を畫す蕃僧の蕃部支配により失敗に終ってしまったのである。すなわち、渭水上流域では裕木扎卜沁のように、宗哥城政權側に身をおく蕃僧と、宋側に身をおき唃厮囉の權威に從わない蕃僧とが、ともに存在していたことがわかる。

そこでつぎに、このように蕃部の佛教信仰を利用してまで政權の擴大をめざした宗哥城政權とはいかなる性格のものであったのか、考えてみたい。唃厮囉の出自や擁立の經緯、それにともなう命名の由來、そして獨裁者李遵の立場などについては、別に詳しく論じたことがある。[33] 大筋に關しては今でもその論旨を變更する考えはないが、いくつかその後、氣のついた點を補足しておきたい。まず、唃厮囉が河州に擁立され蕃部に尊崇された原因について、私はそれが吐蕃王家の末裔という出自と、彼の「貌奇偉」を利用した「佛の化身」とする演出によるものであったとした。唃厮囉とはチベット語の rgyal sras の音譯で「佛の兒」を意味することは論を俟たない。[34] ところが最近、鈴木隆一氏は「ゲルセ—青唐吐蕃王

國の王號」[35]においてゲルセ rgyal sras とは唃厮囉個人の名稱ではなく、王號であり、彼の後繼者たちによってもしばしば使われている實態を明らかにされた。ただその際、漢文史料にはゲルセのもう一つの意味である「王子」という言葉に翻譯されて使用されているとされる。つまり河西チベット族は私がいうほどにゲルセ rgyal sras に佛教的色彩を意識せず、より直接的に權力を意味する稱號として利用したのである、とのことである。鈴木氏の見解はおおむね妥當なものであり、從うべきである。そこで氏の高説にもとづいて「佛兒」と「王子」の關係について私なりに整理しておきたい。[36]

欺南陵溫籛逋 Khri gnam ldeḥi dbon btsan po（オエスン Ḥod sruṅ の子孫のツァンポ btsan po の意）がゲルセ rgyal sras と名をあらためた時期は、隆平集卷二〇夷狄唃厮囉傳に、

咸平中、迎えて河州に至り、文法を立てんと欲す。請いてその名を更め唃厮囉と曰う。

とあるように、河州移住後のことであり、またその當初の意味が「佛兒」であったことは宋史吐蕃傳に、

而して大姓聳昌厮均、また厮囉を以て移公城（循化城）に移し、河州に文法を立てんと欲す。河州人、佛を唃と謂い、兒子を厮囉と謂う。此より唃厮囉と名づく。

とあり、さらに樂全集卷二二秦州奏唃厮囉事に、

唃厮囉（原注）譯に據るに、佛を唃と謂い、兒を厮囉となす。漢語の佛兒なり。

とあるので、間違いない。河州蕃部の聳昌厮均あたりが、唃厮囉の出自にたよるだけでなく、蕃部の佛教信仰をも利用して蕃部の統一を容易にするため、ことさら「王子」のほかに「佛兒」の意味も有する rgyal sras の語を採用し、欺南陵溫籛逋の新しい名前にしたのであろう。まさに拙稿で述べたように「佛の化身」を王族の身分に二重寫しにして人々の心に燒き付けようとした巧妙な演出であったと思われる。後世、ダライラマが觀世音菩薩の化身とされたことはよく知られているが、古代吐蕃王國の創設者ソンツェンガムポ Srong btsan sgam po 王に關しても觀世音菩薩との一體化がみられる。[37] チベット人社會においては、このように佛菩薩と權力者との同一化が行なわれやすかったと思われ、唃厮囉の「佛

兒」信仰もその傳統に從ってのことであったと考えてよかろう。ところが、唃厮囉が宗哥城に移り、李遵を獨裁者とするようになって、しばらくすると唃厮囉の性格から「佛兒」的要素が失われていったようである。それを端的に示す例が、宋會要輯稿蕃夷四回鶻の記事中に、

歸化およびその相索溫守貴、並びに表して言う、「西蕃贊普王子と親をなす」と。

とあることである。文中の「贊普王子」というところは、ウイグル側の文書では、チベット語であらわせば btsan po rgyal sras にあたる文字があったはずである。本來、それは「贊普佛兒」と譯されるはずであるが、ことさら「王子」と譯されていることは、すでに宗哥城政權のもとでは、一段落つくと知名度の高まった rgyal sras のタイトルはそのまま利用しながらも、それに吐蕃王家の末裔としての政治的性格だけを付與するようになっていたものと思われる。宋側翻譯官もその邊の事情を承知のうえで、より實情に卽した譯を採用したのであろう。そしてはからずも、この史料から宗哥城政權のもとでの唃厮囉のタイトルは、正しくは「贊普唃厮囉」というものであったことがわかる。すなわち「王子」號は鈴木氏がいう以上に、すでに唃厮囉時代から採用されていたのである。おそらく當初は李遵も、唃厮囉の宗教的權威を最大限に利用しようとはかったと思われる。しかし秦州蕃部の工作の失敗でもわかるように、河西全域のチベット族に對しては、唃厮囉の宗教的權威は確立されることはなかったのであろう。李遵がじきに僧籍をなげうち還俗した理由も、このあたりに原因があったのではなかろうか。

もう一點、その李遵が宗哥城政權で權力を掌握することができた理由を檢討しなおしてみたい。私は以前、李遵が蕃僧として唃厮囉に影響を與えたことと、宋會要輯稿蕃夷六唃厮囉（以下、宋會要唃厮囉と略稱）に「遵、一名郢成蘭逋叱」とあることから、郢成を姓と解し、李遵を默星族の蕃酋であったとした。[38] しかしその後、山口瑞鳳博士より郢成はチベット語の攝政を意味する diĕng źiäng/sde srid の音譯であろうとの指摘を受けた。[39] そこでこの點もふまえ、李遵獨裁政權の實態をみなおすと、まず、李遵の出自については默星族の蕃酋という舊說は撤回する。後の話であるが、唃厮囉が宗哥城を

出奔した際、その嚮導をなしたのは李遵の姪、訥厮結であった。(40) また李遵が沒した後でも、宗哥城の支配者は李遵の一族の李巴沁という人物であった。彼は唃厮囉と對立した瞎氈、磨氈角と結び、その母で李遵の女の李氏を廓州より救出している。そして磨氈角と李氏を宗哥城に招聘し、再度獨立政權を樹立しているのである。(41) このように宗哥城ではつねに李氏一族が主體的に動いているところから、李遵は本來宗哥城を支配する宗哥蕃部の有力な酋豪であったと考えて閒違いなかろう。唃厮囉を宗哥城に擁した李遵は、當初、論逋 Blon po の地位につくが、前掲宋會要に示したように、別に郢成蘭逋叱という名稱も名のっている。郢成については攝政をさすと思われ、蘭逋叱とは前述したリンポチェのことである。長編卷八三大中祥符七年十二月甲戌の條の割注で李燾は

蓋し、埒克遵の一名は郢城琳布且なり。

と述べている。李燾は正しく rin-po che の音を譯している。つまり李遵は當初、唃厮囉の持つ政敎兩權力を代行する地位を獲得していたことがわかる。そして唃厮囉の宗敎的權威が定着しないとわかると、還俗してリンポチェの稱號もおそらく失ったと思われるが、郢成のタイトルはそのまま保持し、(42) 政治的獨裁者の地位を維持したのである。さらにつけ加えると、李遵は大中祥符九年に宋に對し、こともあろうに贊普の位を要求するまでになったのである。(43)

いずれにせよ、宗哥城政權が成立したころは、各地で蕃僧の政治的な活動がますます活發になっていったのである。

四　蕃僧政權の展開

天聖三年、李遵と訣別した唃厮囉はいったんは溫逋奇を頼り邈川城に入る。ところが、じきに溫逋奇とも對立を生じ、彼を殺害し明道一、二年のころ青唐城に移ったのである。この閒、唃厮囉の長子瞎氈は河州に、次子磨氈角は宗哥城に據り、それぞれ文法を立て、以後、父唃厮囉と激しく對立するのである。(44) 三者の對立は長く續き、結局、嘉祐三年、二子が唃厮囉の三男董氈によって殺害されるまでかわらなかった。(45) その後は董氈、そしてその養嗣子阿里骨を主流として河西チ

ベット族の政治は展開してゆくが、時代が降るに従って政権の分裂は深刻となり、またそれに應じて蕃僧の政治的な動きも一段と活發になってくるのである。そこで、本節では唃厮囉父子の鼎立以後の蕃僧の動きを追ってみよう。

まず瞎氈政權に關しては長編巻一七六至和元年四月己未の條に、瞎氈が官軍を援け古渭州の蕃部の紛爭を處理したことに關連して、秦鳳路經略司の增賜要請のなかに、

「〔瞎氈に〕月に大綵五匹、角茶五斤を增し、妻李薩勒に邑號を與封し、舊軍主李覺薩を都軍主に與轉し、月に大綵三匹、角茶三斤を增し、兄の蕃僧遵錐格に紫を與賜し、月に小綵一匹、散茶三斤を給せんことを欲す。」これに從う。

という記事がある。瞎氈政權には都軍主になった李覺薩と、その兄で紫衣を賜った蕃僧遵錐格の力が強く關與していたことがわかる。さらに瞎氈の死の直後のこととして、長編一八八嘉祐三年冬十月辛丑の條に、

轄戩（瞎氈）既に死す。摩正（木征）弱くして自立すること能わず。青唐の族酋轄約（原注　高永年云う、轄約とは今の岷州包順の兄なり）、格羅、および僧羅遵、迎えて洮州に居せしめ、立てて以て洮・岷・疊・宕・武勝軍諸羌を服さんと欲す。

とある。木征の擁立問題にも、蕃僧鹿遵（羅遵）[46]が蕃酋とともに積極的に動いており、これらの事例から瞎氈父子の政權には、蕃僧の政治力がかなり強くおよんでいたことが考えられる。

一方の磨氈角政權に關しては、宋會要唃厮囉に

皇祐五年十二月、西蕃磨氈角進奉人、蕃部首領に衣服銀帶を賜うに羌（差の誤）あり。

とし、磨氈角配下の蕃酋に對する賜與を記し、つづけて、

進奉首領紫衣僧遵闌氈結逋、首領紫衣僧沈遵、首領紫衣僧黨遵叱臘青、おのおのに紫衣三件、銀器五兩、衣着十疋を賜う。

とある。單純に比較することはできないが、紫衣僧が三名もおり、それが進奉首領と明記されているところから判斷する

と、同政權は瞎氈政權に比し、さらに蕃僧の政治力が強かったと考えてよかろう。特に紫衣僧の沈遵に關しては、宋會要同傳に、

英宗の治平元年六月十四日、秦鳳路經略司言う、「西蕃唃厮囉の進奉首領沈遵太師、漢官に換せんことを乞う。それ沈氈はもとは磨（氈）角下の蕃僧に係わり、毎月綵一疋を支す。本旋正軍主に與換し、請授は舊に依らんことを乞う。」これに從う。

とある。磨氈角の死後、その子瞎撒欺丁の政權は祖母李氏の考えで唃厮囉政權に吸收されるが、(47) 沈遵は唃厮囉政權のもとでは大師號を有する僧侶として登場し、そのうえ漢官の本旋正軍主の地位まで與えられ厚遇されている。このことは當然しかるべき勳功に應ずる處遇と考えられ、おそらく李氏を說得し、瞎撒欺丁政權を唃厮囉政權に吸收させた眞の功勞者こそ、沈遵であったと考えてよいのではなかろうか。このほか、唃厮囉政權に關與する蕃僧としては、後に詳しく觸れるが、宋會要同傳嘉祐八年の條に「蕃僧僧結巴」の名をあげており、さらに治平元年七月の條には「唃厮囉首領蕃僧曹遵等」をあげている。唃厮囉政權にも多くの蕃僧が關與していたことがわかるが、今までみてきた事例や、これから述べることからもわかるように、蕃僧といっても純粹な宗教人ばかりではなく、むしろ實際には蕃部を率いる蕃酋のままで僧籍を得ているものが少なくなかったのである。

晩年、唃厮囉はすでに國事を三男の董氈に委ね、(48) 主權繼承者の明確化をはかっていた。治平二年、唃厮囉が死亡すると、名實ともに董氈の政權が誕生する。しかし一方では瞎氈の政權を繼承した木征が河州に據り、董氈と對峙し、そのほか多くの中小獨立政權が各地に簇生し、統一政權の樹立はさらに困難な時代になっていた。このような河西チベット族の情勢に對し、宋は從來の政策を變更し、西夏の進出を防ぐため積極的な政策を展開するようになった。榎一雄博士の論じた、いわゆる王韶による一連の熙河經略の開始である。(49) そしてこれ以降、史料には董氈政權に屬していなかったと考えられる蕃僧政權の獨自の活動が一層めだつようになってくるのである。まず、熙寧三年になると蕃僧の結吳叱臈と康尊新羅

結の兩名が、木征の弟の董谷を擁し武勝軍に獨立政權を立てようとする事件がおこる。この事件については、詳細は榎博士の研究[50]に讓るが、長編卷二一三熙寧三年七月丙辰の條に、

これより先、蕃僧結斡恰爾（結吳叱藹）および康藏星羅結（康尊新羅結）の兩人は潛かに董裕（董谷）を迎え、武勝軍に詣りて文法を立て、夏國と姻を謀り、諸羌を幷呑するの意あり。

とある。同割注には彼らを生戸とする說を揭載している。いずれにせよ、董氈、木征とは直接の關係を持たない蕃僧が、唃厮囉の孫を擁し要衝武勝軍（臨洮）に親夏政權の樹立をめざしたのである。特に結吳叱藹に關しては、長編卷二二六熙寧四年八月辛酉の條に、

而して僧結斡恰爾の主どる部帳甚だ衆し。

とあるように、あなどりがたい大勢力を有していたことがわかる。また彼は董谷と西夏の婚姻を策するなど、明らかに董氈政權にとってかわり、みずからが河西チベット族の統一政權の樹立をめざしていたと考えられる。唃厮囉を擁立した李遵の姿を彷彿させるものがある。それ故、この事件は宋にとっても大問題であり、新法、舊法兩黨派の閒で處理をめぐって對立がつづき鎭壓に手閒どるが、最終的には王韶により兩人の內附、就禽というかたちで落着をみたことは榎博士の說の通りである。[51]これと前後して、渭水最上流域の有力蕃酋の俞龍珂、旺奇トも相ついで內屬し、熙寧五年閏七月末ごろには武勝軍の收復も實現したのである。宋はこれにともない熙河路の開設を行ない、その經略の手はさらに河州、洮州、岷州方面に直接およぶようになった。このことは必然的に、この地方を勢力圏とする木征との閒で激しい戰鬪をひきおこし、宋は三次におよぶ木征攻擊を敢行することになったのである。[52]王韶を中心とする攻擊は順調に進んだが、熙寧七年になると木征は董氈の武將鬼章と連攜し、最後の大反攻をこころみる。知河州景思立の軍を踏白城に邀擊し、これを全滅せしめ、その餘勢をかって岷州にもせまったが、その時のこととして長編卷二五二同年四月の條に、

己卯、岷州刺史高遵裕を岷州團練使となす。守城の功を旌するなり。賊、景思立の踏白の敗に乘じ岷州を圍む。蕃僧

溫遵、容、李、龍族を率いこれに應ず。道路通ぜざること幾月。或るもの退保を請う。遵裕曰く、「敢て此を議する者は斬らん」と。岷城卑（軍の誤）[53]缺けて守る者恐る。遵裕、西門に登り偏將および包順（兪龍珂）を遣わし、兵を引き縱ままに擊つ。精兵百餘騎を選び、南門より鼓噪して出てこれを合擊す。賊、遂に敗走す。（中略）遵裕謂く「容、李、龍三族、賊に應ず。而して龍氏のみ和爾川砦を破る。度るに盡くは誅する可からず。乃ち二十縑を以て募りて龍氏の一級を取らん」と。斬捕幾盡し、その地を以て弓箭手を招く。容、李を貸し籍（トリタテ）て蕃勇となす。敢て障に乘じその死力を得る。溫遵、能く爲すなきを知り、その徒を率い歸附す。

とある。木征に呼應して蕃僧の溫遵が、容、李、龍三族をひきいて岷州包圍戰に從っている。溫遵は岷州近邊の蕃僧であったと思われるが、文意から判斷すると、實際は容、李、龍三族を支配下におくだけでなく、みずからの部族も有するこの地方の有力蕃酋であったと考えられる。そして龍族をのぞいては積極的な軍事行動をとった形跡がなく、また木征が敗走すると簡單に內附しているところから、元來、木征に屬する蕃酋ではなかったと思われる。おそらく岷州近邊に獨立の僧侶政治を運營し、その時々の政治情勢にたくみに對應し、政權の維持をはかっていった、特定地方を支配する中小政權の首領であったのであろう。

熙寧七年四月、木征はついに宋の軍門に降り、以後、董氈、鬼章もほどなく宋の經略に從うようになる。これにともない西夏の危機意識も高まり、緣邊蕃部をめぐる兩者の爭奪戰は激しくなっていくが、熙寧八年五月には黃河の北方に居を占め、蕃僧に支配される大部族の歸順が行なわれている。[54] これについては宋會要輯稿蕃夷六吐蕃（以下、宋會要吐蕃と略稱）同年の條に、

五月十五日、蕃僧李巴氈を三班長（差の誤）使本族蕃巡檢に補す。巴氈は黃河の北に在り居す。領する所の部族は頗る多く、夏國の地分と接連す。聞くに外界の誘迫する所となる。職名を以てこれを羈縻せん。洮西安撫司の請う所に從うなり。

とある。榎博士によれば李巴氈は河州東北方に據っていたとされ、[55] おそらく地理的にみて蘭州北方の黄河北岸一帯を領有していたと思われる。宋、西夏、そして董氈三勢力の角逐する政治的にもきわめて重要な地域に、前記溫邊にくらべるとはるかに勢力の強い獨自の蕃僧政權が存在していたのである。そしてもう一つ、直接、西夏の壓力のおよぶ地域の蕃僧政權について、翌熙寧九年早々のこととして、長編卷二七五同年五月の條には、

戊辰、熙河路經略司言う、「正月癸酉、生戸隆吉卜等、兵を領し郭莽寺を圍む。蕃僧巴勒斯丹、首領哲卜尊等、蕃兵を率い拒んでこれを卻け十三級を獲す。その得功の蕃官蕃部はみな新に歸附の人にして、能く自效すること此の如し。推恩してこれを奬せんことを乞う」と。詔して賞格の外に逐等に帛一匹を加賜す。すでにして經略司また奏すらく、「得功人は並びに三班差使に補し、うち巴勒斯丹は本族巡檢に充し、哲卜尊、巴勒濟郢城は同巡檢にせんことを乞う」と。並びにこれに從う。

とある。文中の郭莽寺に關しては大通縣志[56]第二部、附僧寺に、

廣惠寺　縣城を去ること北に七十里。原名郭莽寺。兵に燬ける。清雍正十年、敕賜重建す。以上十二僧寺は廣惠寺の僧を推し主とす。乃ち呼圖克圖あり、これを大僧となす。

とあり、[57] 清、民國時代はもとより、現在にまで續いている廣惠寺のことである。同寺は民國時代になっても呼圖克圖（活佛）を擁し、十二寺を總管する大寺院で、西寧の北北東約六〇キロに位置している。長編の記事は宋の經略に對し、それに從う蕃僧巴勒斯丹らと、あくまで抵抗しようとする隆吉卜らとの路線をめぐる內部爭いであったと考えられる。巴勒斯丹は前記李巴氈とまったく同じ三班差使本族巡檢に補せられているところから、この地方の部族を統べる大酋であったことは閒違いなく、また郭莽寺の防衛を行なっているところから、彼は郭莽寺の僧院長でもあったとみてよかろう。そして郭莽寺攻防戰は、當然のことながら、はからずも僧侶政權の中樞が寺院にあったことを確認させ、興味深い。

一方、喚厮囉の主權を繼承した董氈政權の側に身をおく蕃僧で、事實上、蕃酋として行動していたものも少なくなかっ

た。郭莽寺の一件が落着をみた直後の同年九月、董氊配下の旺邈という蕃僧が入界し、禽獲される事件がおこっている。(58) 彼も董氊政權の一翼をになう蕃酋の一人と考えてよかろう。そのほかの蕃僧に關しては、長編卷二九一元豐元年八月の條に、

癸卯、知岷州种諤に詔すらく、「蕃官を集め、鼐爾溫（訥兒溫）および羅卜藏（祿邈）〔の書〕を出し、衆に對して明諭して犯す所は淩遲死に處し、妻女、田產は並びに包誠（旺奇卜?）に賜い、……（中略）」これより先、熙寧中、果莊（鬼章）邊境を犯す。鼐爾溫、羅卜藏、部族を首率し果莊に叛附す。邊事ついで息するにおよび、乃ち來降す。既にしてまた陰かに董戩、果莊と合謀す。諤言えらく、「邊患となることを恐る」と。因て董戩、果莊の與える所の書、および羅卜藏の親書・蕃字を上る。故にこの詔あり。

という記事がある。文中の羅卜藏は宋會要吐蕃の對應記事には祿尊と記されている。そして、さらに彼に關しては宋會要同三年の條に、

正月二十九日、熙河路經略司言う、「邈川城主溫訥支郢成、首領阿〔篤〕等を遣わし款塞す。官職に補せんことを乞う」と。詔して、訥支郢城（ママ）を會州團練使、邈川蕃部都巡檢使となす。（中略）僧祿尊を祿厮結族都虞候となす。月に茶帛を給すること差あり。

とあり、蕃僧であったことがわかる。また二〇年前、木征擁立に動いた鹿邈も同一人物と考えられるが、その時々に應じてたくみに身を處してゆく蕃僧の姿をあらわしている。そして祿厮結族都虞候に任ぜられたことをもってすれば、祿尊もまた本來は祿厮結族を支配する蕃僧の一人であったのであろう。祿尊はさらに阿里骨政權が誕生して閒もない元豐七年十月の神宗の西夏征討を督諭した手詔中にも、「遣來蕃僧祿尊口陳邊謀……」(59) とあり、その後も宋との交渉役として活躍していたことがわかる。

このように、唃厮囉とその後繼者たちの時代になると、蕃僧によって支配されていたと考えられる蕃部の數がめだつよ

うになってくる。しかしながらこのことは、蕃僧がその身分を利用して、蕃部を支配するようになったということを意味しているものではない。すでに個々の事例からもわかるように、實際は蕃酋がその蕃部に對する政治權力を保ちながら、出家して僧服をまとっていたというのが實態であった。前掲、瞎氊政權に關與していた蕃僧遵錐格とその弟は、兄は紫衣を、弟は舊軍主から都軍主の地位を賜っている。これなどは遵錐格兄弟の出自が本來蕃酋であったことを如實に物語る好例である。そこで、何故に僧侶になる蕃酋が増えたのか、その理由を考えてみたい。まず第一にいえることは、何よりも河西チベット族全體の佛教信仰が隆盛におもむき、それに從って僧侶の社會的地位も高まり、人々の聖俗の指導者としての立場が確立されていたことにある。元符年間、青唐經略に從った李遠の青唐錄(60)には

吐蕃、僧を重んじ大事あれば必ず僧を集め、これを決す。僧の法に罹るも免ぜざる者なし。

とある。また長編卷五一四元符二年八月甲午の條に、

孫路奏すらく、前後招到する西蕃大小首領、蕃僧等三千餘人。

とあるのは、蕃僧が單なる宗教人ではなく、世俗權力を握る蕃酋とその性格が近かったことをうかがわせる。さらに、續資治通鑑長編拾補卷二三崇寧三年正月丁酉の條に、

また、廓州蕃僧、大軍の到るを候ち、酒を獻ぜんと欲す。

とあるのも、蕃僧が蕃部の指導者として行動したことを示す史料であろう。

しかし同時に、僧侶という身分が一般人とは異なる神聖な存在として人々の尊崇を得ていたことも確かである。前掲長編卷五一四の八月戊子の條に、阿里骨の子瞎正の敗北を記し、

ついで妻子と削髪し、僧尼となり城西佛舍に入る。時に七月庚午なり。蓋し蕃俗、僧尼となる者はみな殺さず。瞎正ただ死を逃れんと欲するのみ。

とあり、僧籍にあるものを特別に扱っていたことがわかる。また、清波雜誌卷十に康定二年の劉渙の唃厮囉への行使を記

したなかに、

蕃法（原注　姚本部）ただ僧人の過ぎる所のみ拘留せられず。飲食を資給す。渙乃ち落髪僧衣し以て行く。

とあるのも、人々が僧侶を特別な身分の人として敬愛していたことを示している。古代吐蕃王國時代、僧侶の地位は非常に高く、大臣の上位に置かれるものもあったようだが、[61] 佛教復興期のこの時代にあっては、僧侶が社會的にも、そして信仰的にも人々に尊崇されていたことがわかる。このような事情から、その理由の一つとして蕃酋が聖俗の兩面を利用して、さらに蕃部支配を容易にするため、みずからも僧服をまとうようになったと考えてよかろう。ただしその際、彼らが蕃部を敬服させるに足る信仰心を持っていたことも事實であろう。王韶が木征の弟董谷を擁立しようとした結吳叱藹、康尊新羅結の兩蕃僧を經略した時、王安石がわざわざ僧智緣を拔擢してその任にあてたことは榎博士の論じたところであるが、[63] これなどは當然、結吳叱藹の信仰心を充分に考慮に入れての作戰であり、僧智緣の說く利病得失に結吳叱藹が從ったのである。また、長編卷四四四元祐五年六月辛酉の條の阿里骨と溫錫沁の紛爭を記したなかに、[62]

蕃僧卦斯敦、その徒千餘人、國中上下共に敬信する所。鄂特淩古（阿里骨）妄りに殺戮を行なう。また頗る恚忿の言あり。

という記述がある。前後の關係から卦斯敦は蕃酋と考えられ、蕃酋が蕃僧として蕃部の敬信を得ていたことが實例として證明されている。

第二の理由が寺院に關する諸問題である。これについては、すでに佐藤長博士に非常に有益な研究がある。博士は「ダルマ王の子孫について」[64] のなかで、古代王朝の發祥地ヤルルン溪谷に勢力を張っていたヤルルンジョウォと呼ばれる諸侯一族を例にして、中世の寺院と俗的諸侯の關係を論じられた。論旨は「大寺院を經濟的にも軍事的にもサポートし、或は積極的に僧院長を一族から連續的に出して、その地位を獨占したのはこれら俗的諸侯であったのではないか。（三四頁）」というもので、その理由として「當時の僧院長は彼等俗的諸侯乃至は貴族等の紛爭又は戰鬪の仲裁をしなければならぬという一

種の社會的責任を背負っていた。平民出身の、生れながらに高貴性のない僧院長やラマが、このような重要な任務を充分に果し得たであろうか。寺格を高める上からも、たとえ象徴的でもあれ、貴族出身の僧院長は僧院側からも強く希望されていたに相違ないのである。（六七頁）」とし、さらに何故代々の僧院長を一家が獨占していたのか、その理由について「即ち一般に僧院長の財産は僧團の財産とは別個に存在する。しかし僧院長が歿したとき、その財産は次の僧院長又は僧團に引繼がれることはあっても、その出身の貴族の實家に戻ることはない。そこで貴族側は歿した僧院長に血統の近いラマを強力に推し、その財産と地位を彼に譲渡させるようにする。僧院の保持にその貴族が常に盡力を惜しまなければ、彼の發言は強大な效果を現すであろう。いわば貴族側はここに僧院長という名の別の分家を創設することになるのである。（同頁）」と結論づけられたのである。なお、博士は十二世紀の初頭では、このような一族の繼承は一般化したものとはいえない、としながらもいくつかの例を記している。[65] つまり同然のことが河西チベット族の社會でも、この時代に行なわれていたことは確實であり、第六節で史料を明記するが、喃厮囉に仕えていた蕃僧の馬取逋厮鷄が死亡すると、紫衣が姪の蕃僧僧結巴に受けつがれているのは、具體的には一族による僧院長の繼承を意味しているのであろう。また、これもさきに觸れたが、瞎氈に從った蕃僧遵錐格と弟の李覺薩の例などは、兄が僧院長になり寺院を掌握していた證據であろう。そして、つぎに考えられることは寺院の經濟力の問題である。佐藤博士は俗的勢力が寺院を經濟的に支えていたとされるが、私はむしろ寺院の行なう經濟活動を俗的勢力が依存ないしは利用していたのではないかと思う。古今の歴史を閲するに、大寺院が地域の經濟活動の核になっていた例は東西に枚擧にいとまがない。時代は降るが民國時代のこの地方の寺院の經濟活動について、周振鶴の青海[66]には「森林の收入」のほかに「經商の獲利」を掲げている。[67] これをもって十一、二世紀の寺院經濟を推測することはあまりにも無謀であるが、長編卷一〇三天聖三年冬十月の條に、

庚申、陝西轉運司言う、「秦州蕃官軍主策拉等、來遠寨に佛寺を置き、以て往來、市馬の人の館とせんことを請う」と。これに從う。

という記述がある。馬貿易などの據點とするために蕃酋が寺院の建立を行なおうとしているのである。僧侶が最も安全な旅行者であった事實を加えれば、おそらく馬貿易に限らず當時から廣く經濟活動に寺院が重要な役割をはたしていたことは、充分推測することができる。こうした經濟力の掌握という點も、蕃酋が僧籍を得るようになった理由として考えてよかろう。さらに最後に加えるとすれば、寺院の軍事面の利用である。現在でもチベットの寺院が山を背にして要害の地に造營されていることはよく知られている。第六節で述べる廣仁禪院の場合も同樣である。再び民國時代の史料で參考にならないかも知れないが、玉樹調査記[68]、卷上政治に

寺僧また軍に能く、その戰鬪は番民に較べ尤力なり。經堂の楣閒には常に槍械、刀劍、および古甲冑、弓矢、戈矛の類を懸く。番俗、百戸死すれば、則ち生平用いる所の兵器を以て、これを寺院に輸し、以て齋醮の酬謝物となす。

とあり、寺院が一種の武器庫の觀を呈している樣子を記している。宋代においても同樣の役割を寺院が持っていたのではなかろうか、疑問にとどめておく。しかし、郭莽寺の事例からも、寺院が軍事據點として重要な意味を持っていたと考えても大過なかろう。

五　佛教信仰の諸樣相

蕃僧が政治的に高い地位を保障されただけでなく、各地に蕃僧政權の成立をも可能にした、河西チベット族の佛教信仰とは具體的にどのようなものであったのであろうか。

教團の組織や機構、あるいは教義等、最も知りたいことがらについては、史料が皆無であるため殘念ながら不明というほかはない。この時代はちょうど佛教の復興期にあたり、アティーシャ Atiśa（九八二―一〇五四）の入藏で象徴されるように、佛教界全體に新らしい動きがおこりつつある時代であった[69]。一〇一五年に生まれラデン寺の僧院長になったチャンチュブチュンネはツォンカの出身[70]であったことから考えあわせても、中央チベットと河西地方の寺院の交流は充分に行な

われていたと思われる。次節で触れるように宋との關係も考慮されるが、基本的には中央チベットと同様の僧院の運營や教義が行なわれていたと考えてよかろう。本節では漢文史料に記された河西チベット族の佛教信仰に關係する記述を示し、その實態の一斑をうかがってみたい。

河西チベット族の佛教信仰の具體的な様相を知る手がかりはきわめて少ない。そうしたなかにあって岷縣廣福寺に現存する廣仁禪院碑(71)は、同時代の碑文史料としては管見のおよぶかぎり唯一のものである。この碑文は、次節で説明する宋の蕃部懐柔策の一環として、岷州に建立された同寺の縁起を記したものであるが、末尾に「〔元豐〕七年八月十四日記」とあり、碑文の建立された時期が確認できることと、剝落等がほとんどないことで史料的價値がきわめて高いものである。同碑文には、河西チベット族の信仰について、

西羌の俗、みずから佛教を知る。毎にその部人の多寡を計り、その奉ずべき佛者を推擇し、これを爲らしむ。

と記しており、各部族ごとに特定の佛像を本尊にして、信仰している様子がうかがわれる。そして、このような各蕃部の信仰を牽引し、大檀越としての役割をはたしていたのも蕃酋たちであったことはいうまでもない。同碑文には廣仁禪院の建立にあたって、

岷州の寺、廣仁禪院と曰う。是において守臣はこれが力となり、哲僧はこれが幹となり、酋豪はこれが助けとなる。

と記し、さらに具體的に、

郡の豪酋の趙醇忠、包順、包誠と曰うもの、皆財を施し像を造る。荆榛薙ぎて宮殿は巍然たり。門扉闢(ヒラ)きて金人は煥然たり。ついで則ち鐘を範し、以てその時を鼓し、經を藏し、以てその道を尊ぶ。

と記している。趙醇忠とは木征の弟巴氊角のことで、包順、包誠はさきに述べたように王韶の經略に順った熙河地方の有力蕃酋の兪龍珂とおそらく旺奇トのことである。この史料は宋に歸順した蕃酋の佛教信仰を示す事例であるが、唃厮囉の後繼者たちもひとしく佛教に深く歸依していた。その様子を、長編には「董戩（氊）、摩正（木征）は多く僧と親善するを

以て」と記している。[72] さらに巻五〇七元符二年三月庚午の條には、阿里骨の佛教信仰に關し、

鄂特凌古（阿里骨）に寄語して曰く、「吾は乃ち疎屬。また嘗て佛書を讀み、今すでに僧となる。相疑うこと毋れ」と。鄂特凌古、溪巴溫の忌むに足らざることを習知し、遂にこれを置く。羌俗、浮屠の法を尚び、鄂特凌古は尤も好んで塔寺を營み、土功に勤む。

と記している。文中の溪巴溫とは前掲溫錫沁の子であるが、彼についても長編は割注で「また、溪巴溫は佛種人なるを以て頗るこれに附す」とある。[73] このように、阿里骨や溪巴溫はみずからも出家するまでになっていたことがわかるが、董氈や阿里骨といった青唐城の歴代の主權者が佛教をまさに國教として敬い、その政治も佛教的色彩にいろどられていた様子を、李遠青唐錄には、同城が東西二城にわかれていたとし、

僞主は西城に居す。門には譙樓二重を設け、譙樓の後に中門を設く、また儀門を設く。（中略）儀門の北を過ぐること二百餘歩、大殿を爲る。楹棟はみな黄を繪り、王殿の基は高さ八、九尺。座を去ること丈餘と。碧琉璃磚これを環り、羌は禁闥と呼ぶ。凡そ首領の升殿し、事を白すは琉璃磚外に止まり、犯す者はこれを殺す。傍に金冶の佛像、高さ數十尺を設け、飾るに眞珠を以てし、覆うに羽蓋を以てす。

と記している。これらの記述から、一斑を以て全豹を推し測れば、河西チベット族の蕃酋たちは、蕃部の支配者であると同時に、信仰面においてもその中心的役割をはたしていたことがあらためてわかるのである。

また、廣仁禪院や前節で述べた秦州來遠寨に策拉が建立しようとした寺院などから、寺院の建立には各地の蕃酋の力が強く關與していたことがわかり、寺院の建立は世俗勢力のひとつの力の證明にもなっていたのであろう。

そこで、彼らの建立した寺院に話を移そう。阿里骨の居城であった青唐城に關し、同じく青唐錄には

城の西に青唐水あり、宗河に注ぐ。東西平遠にして佛祠を建つ。廣さ五、六里。繚（メグ）らすに周垣を以てし、屋は千餘に至る。楹に大像を爲り、黄金を以てその身に塗る。また浮屠十二級を爲り、以てこれを護る。阿里骨、民を斂めこの

像を作る。

とあり、城の西郊にある大伽藍の壯麗な様子を記している。この寺院については、前述した長編所引の阿里骨の嗣子瞎正が出家した際の「城西の佛舍」に一致するものであり、おそらくは河西地方最大の規模を誇った大寺院であったのであろう。さらに青唐錄には

城中の佛舍居半なり。ただ國主殿および佛舍は瓦を以てし、餘は主の宮室と雖も、また土にてこれを覆う。

とあるように、青唐城中にも寺院の甍が軒をつらねていた様子を記し、まさに青唐城は宗教都市の觀を呈していたことがわかる。元符二年、奸將王贍によって邈川、青唐兩城が襲われた際、「金銀佛像」[74]、あるいは「金佛三尊みな珠子瓔珞を帶す」[75]などが略奪の對象になったが、これは青唐城內に寺院が多數存在していたことを反映しているのであろう。一方、趙醇忠、包順、包誠らの施財によって作られた廣仁禪院については、同碑文の前掲記事につづけて、

徒には常居あり、客には攸舍あり。儲峙には廩あり、涓潔には庖あり。最てそれ凡そ四百六十區。その衆、これを高山大川、深林巨郭の際に瞻る。來る者は趨き、過る者は下りて咸曰く、「壯なるかな」と。吾土の未だ嘗てあらざるなり。吾が昔のいわゆる佛居にして、その教を持し口となるを知ると。岷州は故和政郡にして、吐谷渾、青海の塞に通じ、南は白馬氐の地に直り、大山重複し以て環繞し、洮水その中に蕩潏す。山川の勝は以て天下の壯偉と言うべし。前日の頽垣廢壘は、今の雉堞樓櫓にして、以てこれを衞り、前日の板屋聚落は、今の棟宇衢巷にして、以てこれを列す。また、佛宮塔廟を得て、以てその城邑に壯にす。凡そ人物を阜にし、風俗を變ずる者、信に以て此に過ぎる無きなり。

と、その様子を記している。このほか、史料中から寺院名をひろい出してみると、康定元年、劉渙が唃厮囉に使いした時の道順について、長編卷一二八同年八月癸卯の條に、

渙、古渭州を出て瑪爾巴山を循り、河州國門寺に至る。河を絕り廓州を踰え、青唐城に抵る。

とあり、河州には國門寺が存在していたことがわかる。唃厮囉を當初擁立した何郎業賢や聳昌厮均は河州の蕃酋であった

ことから、彼らとの關係も考えられなくはない。清代の河州誌[76]によると、河州には唐の初建になる萬壽寺もあり、おそらく當時はともに蕃僧によって運營されていたものと考えてよかろう。民國時代、青海省に存在する寺院數について、前掲、周振鶴の青海では「青海全省共に寺院一百四十三處あり」[77]と記し、康敷鎔は青海記（中國方志叢書）で塔爾寺をはじめとして二二三の寺院を錄している。宋代にはどのくらいの寺院があったのだろうか。縷々述べてきたように、蕃部の佛教信仰と、そして各地に簇生した蕃僧政權から推量すると、蕃部の存在するところには必ず何らかの佛教建造物が附屬するようになっていたのではなかろうか。これらの寺院はそれぞれに榮枯盛衰を經たであろうが、なかには郭莽寺や廣仁禪院のように、名をあらためながらも現在に至るまで脈々とその法燈を傳えている寺院もあり、彼らの佛教信仰の歴史と傳統を物語るに充分である。

最後に、蕃僧たちの日常生活はどのようなものであったのだろうか。これについても廣仁禪院碑以外には適當な史料がみあたらない。同碑には、

その貝葉傍行の書を誦えるや、侏儒鴃舌（蠻夷の言語の意）の辨ずるべからずと雖も、その音は琅然として千丈の水の壑に赴いて止まるを知らざるが如し。また、秋冬の閒、糧を聚め出でず。廬室の中に安坐すること有り。坐禪と曰う。これ、その心の豈に精粹にして理を識る者の無からんや。但だ世のこれを知ることの莫きのみ。然りと雖も、その人、多く佛を知りて戒を知らず。故に妻子具にして淫殺やまず。口腹縱にして葷酣厭わず。

と記し、ツォンカパによる改革以前の、いわゆる紅帽派のチベット僧院の生活の一端を垣閒みる思いがする。なお、「貝葉傍行」のチベット經典の用紙の入手について、宋會要吐蕃に鬼章が馬十三疋を送り寫經紙を宋に求めた記述がある。供給先を知るうえで參考にしたい。

六　宋の佛教利用政策

河西チベット族の佛教信仰に着目し、宋がこれを利用して蕃部の經營を有利に導こうとしたことはけだし當然であった。そしてその方法は大別すると二つあった。その一つは蕃部のリーダーである蕃僧に照準をあわせたものであり、もう一つは蕃部全體を對象にしたものであった。そして、この二つの政策は、ほぼ前後の關係を有するものであった。蕃僧に對する政策とは、すでに各節でしばしば觸れた紫衣、師號の賜與がそのおもなものである。この問題については、まず周邊の他の民族との比較を通して考えねばならないが、長編、宋會要等基本史料を瞥見しても、甘州回鶻、瓜沙州、龜茲、西南蠻等の各政權に關しては、紫衣の賜與がそれぞれわずか二、三回にしかすぎない。それに對し、河西チベット族に關しては、蕃僧に與えた紫衣關係の記事が一三回を數える。このことは宋が他の民族に比較して、西夏牽制の必要性から、河西チベット族との關係を重視していたあらわれである。また、紫衣、師號の賜與が他の民族の場合のように儀禮的、名譽的なものではなく、蕃僧の政治的な役割を宋が充分に評價していた證據でもある。重複をいとわず、以下、順次その事例を簡單に紹介すると、第二節でも述べたが、西涼府時代は厮鐸督政權のもとで三回、三名の僧侶が紫方袍を賜っている。ここでもすでに、政權に密着した僧侶の活動がみてとれる。そして唃厮囉を擁した宗哥城政權が成立するころから、紫衣、師號の賜與も數を增し、その內容もより蕃僧の政治的な役割に應ずるものになっていった。まず、大中祥符八年に涇原界の「掌事」蕃僧哩碩琳布齊ら四人が紫方袍と師號を賜ったことはすでに述べた。くりかえしになるが、これなどは西涼府政權にも、宗哥城政權にも屬さない第三の勢力としての涇原界蕃部に曹瑋が着目し、統率者である蕃僧に紫衣、師號を賜與することによって、事實上、宋に順う蕃僧政權の成立を認めたことを意味している。天禧三年の秦州永寧寨の蕃僧や、翌四年の秦州蕃僧莽布瑪喇幹に對する紫衣の賜與についても、前述したように曹瑋による同じ政策にもとづくものであった。ところが、これよりおよそ二〇年後に相ついで行なわれた事例は多少性格の異なるものになっている。司馬光

の涑水紀聞巻十二寶元二年四月の條に、

癸亥、樞密院奏すらく、唃厮囉の前妻は尼となる。すでに二子あり。今、再び喬氏の女を娶り妻となす。詔して唃厮囉の前妻に紫衣、師號および法名を賜う。今妻には邑號を賜う。二子は並びに團練使に除す。

とある。唃厮囉の前妻とは李遵の女であり、瞎氈、磨氈角の母のことである。前妻が尼になったいきさつや、唃厮囉父子の對立については、すでに別稿で詳しく觸れたが(78)、實はこの賜與、授官の前に、西夏と河西チベット族は前後五次、七年におよぶ大戰爭を行ない、唃厮囉側は大敗北を喫していたのである(79)。唃厮囉と二子を和解させ、西夏に對する牽制勢力の再建をめざす宋にとって、前妻に對する紫衣、師號のみならず法名の賜與は、まさに蕃部の佛敎信仰に訴える切り札として用意されたものであったといえる。直接河西チベット族とは關係ないが、麟府州の僧道に與えた紫衣、師號や(80)、翌二年、渭州崆峒山の僧法淳らが蕃漢老幼を守った功により紫衣、師號を賜ったことも(81)、西夏の侵攻に對應する宋の方策であった。これ以後の紫衣、師號に關しては第四節で詳述したように、いずれもかなり政治力を持っていたと考えられる蕃僧が對象になっている。このように河西チベット族に對する紫衣、師號の賜與は他の周邊民族に對するように單に儀禮的なものではなく、その時々の情勢に應じ、かなり政治的な意味を持って行なわれていたことがわかる。そして同時に、注目すべきことは河西チベット族の側でも、宋から與えられる紫衣、師號を、單に名譽的なものとしてとらえていたのではなく、實際上の地位の象徵として重要視していたことがわかる。それを證明するのが、唃厮囉のもとにおける事例である。宋會要唃厮囉嘉祐八年の條に、

八月十五日、秦鳳路經略司言う、「西蕃唃厮囉の蕃僧馬取逋厮鷄死す。姪に蕃僧僧結巴あり、紫衣を承襲せしめん」と。これに從う。

とある。この史料は第四節で述べたように、同族による僧院長の繼承を意味する記事と考えられるが、その際に宋から與えられた紫衣が承襲されているのである。河西チベット族の佛敎勢力のもとでは、このように紫衣が宋の企圖以上の價値

を發揮するようになっているのである。そしてこれ以外にも、佛教勢力が宋に依存する面は意外と多かったのである。王韶による一連の熙河經略のなかで、僧智緣の招撫に應じた結吳叱藺に關し、長編卷二三〇熙寧五年二月の條に、

甲子、僧智緣および結斡恰爾、戒院を置き、および茶綵を關せんことを乞う。

とあるように、佛教の本質に大きく關係する戒院の設置を宋に求めているのである。さらに長編卷二三七同年八月の條に、

庚辰、王韶（中略）また奏すらく、「度僧牒五百を乞い、給して蕃僧に勾當せん」と。並びにこれに從う。

とある。王韶は蕃僧用に度僧牒五百を要求している。宋代は紫衣、師號の制同様に度僧牒が財源確保の一手段としてさかんに使われたことは周知のことである。しかし、蕃僧に對しては政治的、宗教的必然性から行なわれたものであることは疑いなく、これは蕃僧のなかにも宋の勢力圈に身をおき、地位の安泰をはかろうとするものがふえてきたことへの對應であったのであろう。(82) 宋の經略が徹底して行なわれた地域では、佛教勢力がこのように宋にとりこまれる現象がおこっていたのである。しかし、より本質的には、吐蕃王國が滅亡し、チベット全土に通ずる統一的、宗教的權威が確立されていなかったことが、このような狀況をひきおこす原因であったとすべきであろう。

ところで、河西チベット族の衰退と王韶の熙河經略の成功は、宋にとって宗教政策に關してもさらに積極的な對應をとることを可能にした。つまり從來は、西夏の牽制勢力を確保する目的で蕃僧政權など、政治勢力に照準をあわせるものであった。ところが、河西チベット族全體が衰退し、その役割をになえないことが明確になると、宋は蕃部全體を對象にした佛教政策により、その內包化を企圖するようになったのである。すなわち寺院の建立によって、河西チベット族の宗教的懷柔政策がとられるようになったのである。長編卷二三九熙寧五年冬十月甲申の條に、

秦鳳路緣邊安撫司に錢一萬緡を賜う。鎭洮軍に僧寺を建て、大威德禪院を以て額となす。

とある。宋は熙河經略の據點鎭洮軍（熙州）に、まず最初の寺院の建立をめざしたのである。しかし長編二四七翌六年十

月戊寅の條に、

また詔して、熙州大威德、河州德廣禪院に歳に各々錢五十萬を賜い、道場を設け漢蕃陣亡の人のために福を營ましむ。

とあるように、ほぼ同じ時期に河州にも德廣禪院が建立されたことがわかる。寺院の建立は漢蕃陣亡の人々の菩提を弔うことを目的としているが、それが蕃部の懐柔と漢蕃の融和をめざすためであったことはいうまでもない。河州方面に關しては戰鬪の激しさを反映してか、このほかにも二つの寺院の建立が行なわれた。長編卷二五三同七年五月辛丑の條に、

熙河路走馬承受長孫良臣を遣わし熙州に往かしめ、踏白城陣亡將士のために浮圖道場を作らしむ。七晝夜河州に命じて暴骸を收瘞せしむ。

とあり、さらに長編二八九元豐元年四月甲子の條に、

河州請う、「城の東北隅、附山不食の地二頃を以て墓園を作り蕃漢陣亡の暴骸を瘞め、すでに僧を擇び修葺を看管せしむ。院額を賜ること太原府の例に依り、二年に僧一人を度せんことを乞う。」これに從う。仍って慈濟を以て額となす。

とある。これらの寺院は前掲の河州誌など地方誌を閲しても該當する寺院が見當らず、いずれもその後の變遷が不明である。これに對し、同じころ岷州に建立された廣仁禪院が、民國時代になっても廣福寺という名で連綿と法燈が守られていたことは前述した通りである。前掲廣仁禪院碑には、その冒頭に同寺建立の由來を記して、

王師既に西疆を開くや郡縣みな復し、名山大川悉く封內に在り。惟に是れ人物の未だ阜(サカン)ならざれば繁庶せしむる所以の理を思い、風俗の未だ復さざれば變革する所以の道を求む。詩書禮樂の外、蓋し佛氏の道、大なるものあり。乃ち數州に敕しみな佛寺を建つ。岷州の寺、廣仁禪院と曰う。是に於て守臣はこれが力となり、哲僧はこれが幹となり、酋豪はこれが助けとなる。累歳を經歴すると雖も、而して數百區の盛、一旦にして就するが若し。初め前守种侯、爽塏の地を川の西南に度り、山を背にし川に面し、以て數百區の廣を容るべきを規り、おもえらく「是の如く宏大にあ

らざれば、則ち佛宇の尊を稱するに足らず」と。今守張侯謂えらく、「經營の既に久しくして勤者の有惰を恐る」と。日に戒を加え促してその成功を底(イタ)す。初め岷州の復するや、詔して、秦州長道、大潭二縣を以てこれに隷せしむ。長道に僧あり、海淵と曰い漢源の骨谷に居す。その道は一方に信じられ、遠近歸慕する者衆し。州乃ち海淵を迎え、以てその事を主らしむ。その道は身を勤め、以て下を率い人を愛して物におよぶ。始めて至ればすなわちその力のおよぶ所を程り、必ず力をしてその事に勝え事をしてその日に足らしむ。また藥病呪水の術あり、老幼爭いて趨き、或ものは車を以て致し、或ものは馬を以て馱し、健者はすなわち扶持して至る。人大いに歸信す。

とある。ここで注目すべきことは、漢人僧海淵の活躍である。宋はただ河西チベット族の佛教信仰に迎合して寺院の建立を行なっただけではなく、漢人僧侶の宗教的權威を最大限に演出して蕃部の信仰心を獲得し、宗教面からの蕃部の熟戸化をはかっていったのである。おそらく熙州の大威德禪院も河州の德廣禪院も、この岷州の廣仁禪院と同じような規模と、そして役割をはたしていたのであろう。まさに、宋にとってはこれら寺院の建立は王韶らによって行なわれた熙河經略の畫龍點睛であったのである。

七　おわりに

古代吐蕃王國が滅亡してから、ダライラマ政權が誕生するまでの間、チベットの歴史は不明の點が多い。そのなかにあって、中央チベットからは邊境に位置するアムド地方において、十一世紀、吐蕃王國の末裔唃厮囉を祖とする河西チベット族が、ほぼ一世紀、宋、西夏の間にあって史上に特異な光芒を放ち、そして消えていった。彼らの歴史は佛教的色彩に強くいろどられていた。唃厮囉も、そしてその後繼者たちも佛教に深く歸依していた。彼らの居城青唐城はさながら宗教都市の觀を呈していた。僧侶は常に政權内部で重要な位置にあった。彼らはただの宗教人ではなく、政權運營の一翼をになっていた。

しかし、信仰は支配階級の特權ではなかった。人々は部落ごとに本尊を持ち、僧侶をあつく敬まっていた。寺院は蕃酋にとって地域支配の要の意味を持つようになっていた。唃厮囉とその後繼者たちの政權が、宋、西夏の壓力により衰退してゆく一方で、各地の蕃酋はみずからも僧服をまとうようになった。無政府狀態のなかで、それぞれの蕃部を支配するためには權力の集中發揮が必要であった。政教兩權力を有する大小さまざまの蕃僧政權が、各地に多數誕生するようになったのである。我々は、後年の寺院勢力を中心とする佛教王國チベットの先驅を、この河西チベット族のなかに、確實にみてとることができるのである。

註

（1）康敷鎔『青海記』（中國方志叢書）の古蹟に、
塔爾寺　城の南五十里の山林中に在り。青海最大にして最も有名の寺なり。黄教の始祖宗喀巴のその地に降生するにより、故に佛教徒みなこれを重視す。
とある。

（2）宋史卷四九二列傳第二百五十一外國八吐蕃（以下、宋史吐蕃傳と略稱）。なお、本論文の人名表記は宋史に從った。

（3）西田龍雄「西夏の佛教について」『南都佛教』二二號、一九六九年。西田氏は同論文で經典の翻譯は漢譯だけではなく、チベット語からの譯も多かったとされる。地理的、時間的關係からいって、河西チベット族の佛教が直接、西夏に達していたと考えて大過なかろう。

（4）拙稿「西涼府潘羅支政權始末考（以下、西涼府潘羅支と略稱）」『東方學』第四十七輯。

（5）宋會要輯稿方域二一西涼府（以下、宋會要西涼府と略稱）もほぼ同文を掲載する。

（6）同右。

（7）前田正名『河西の歴史地理學的研究』吉川弘文館、一九六四年、五三九頁。ただし著者の論旨には從いがたい。

（8）土肥義和「Ⅴ歸義軍（唐後期・五代・宋初）時代」第四節、歸義軍と敦煌佛教教團、『講座敦煌2　敦煌の歴史』大東出版社、一九八〇年、二六一頁。

（9）拙稿「西涼府潘羅支」二八頁。

（10）『鐵橋金石跋』卷四西夏に「皆慶寺感通塔碑」として、
右碑は涼州大雲寺に在り。西夏崇宗天祐民安五年立つ。
とある。金石續編卷二〇、八瓊室金石補正卷一二二等に銘文が掲載されている。なお、西田氏前掲論文に日本語譯がある。

（11）張之洽、張玿美等撰、乾隆十四年序刊本。

（12）張維撰『隴右金石錄』民國二七年、卷二の末尾に、

大雲寺古鐘　武威東城に在り、今に存す。

とし、養索堂詩集自注、新通志稿を引用し、その由來、形狀を記しているが、その時代に關しては、「按ずるに、此の鐘の時代は傳聞各々異なる。而してその形狀甚だ古樸。傳聞する所は五代を以て最近となす。因て此に附す」と述べている。

(13) 宋史吐蕃傳、宋會要輯稿蕃夷七歷代朝貢、續資治通鑑長編（以下、長編と略稱）卷七六、ほぼ同文。

(14) 塚本善隆「宋の財政難と佛敎」『桑原博士還曆記念東洋史論叢』弘文堂、一九三一年、曾我部靜雄「宋代の度牒雜考」『史學雜誌』四一編第五號、一九三〇年、等參照。

(15) 厮鐸督政權の確立には六谷蕃部の協力が大であったことは拙稿「西涼府潘羅支」三八頁で論じた通りである。厮鐸督以降、僧侶の活動がめだつところから、政權樹立には僧侶もひと役買っていたと考えてよかろう。

(16) 同右拙稿、三六頁參照。

(17) 山口瑞鳳「Ⅳ吐蕃支配時代」第三節、敦煌の佛敎界、『講座敦煌2　敦煌の歷史』、土肥前揭論文參照。

(18) 山口前揭論文、二〇三頁。

(19) 同右、二二七頁。

(20) 同右、二二八頁。

(21) 沖本克巳「サムイェーの宗論をめぐる諸問題」『東洋學術研究』第二一卷第二號、一九八二年、四七頁。

(22) R. A. スタン著、山口瑞鳳・定方晟譯『チベットの文化』岩波書店、一九七一年、六三頁。

(23) 土肥前揭論文、二六一、二頁。

(24) 拙稿「宗哥城唃厮囉政權の性格と企圖（以下、性格と企圖と略稱）」『中央大學アジア史研究』第二號、一九七八年、四頁以降。

(25) 同右、第三節參照。

(26) 同右。

(27) 同右、二六頁、註一八參照。

(28) 大師號は、河西チベット族に關してもわずか三回だけしか與えられていない。

(29) 拙稿「性格と企圖」第二節參照。

(30) 榎一雄「王韶の熙河經略に就いて」『蒙古學報』第一號、一九四〇年、九一頁、拙稿「西涼府政權の滅亡と宗哥族の發展（以下、宗哥族の發展と略稱）」『鈴木俊先生古稀記念東洋史論叢』山川出版社、一九七五年、八八頁、註(32)參照。榎博士の見解がもっともまとまっているが、文法に關しては未解決の問題が多い。

(31) 拙稿「性格と企圖」一〇頁。

(32) 同右、一二頁。

(33) 拙稿「宗哥族の發展」第四節、「性格と企圖」第一節、參照。

(34) H. A. Jäschke の TIBETAN-ENGLISH DICTIONARY では 1. Prince. 2. son of Buddha, a saint とある。

(35) 『安田學園研究紀要』二五、一九八五年。

(36) 山口瑞鳳「吐蕃の國號と羊同の位置——附國傳と大・小羊

同の研究――」『東洋學報』第五八卷三・四合併號、一九七七年、九五頁、補註五參照。同論文は同氏『吐蕃王國成立史研究』岩波書店、一九八三年に、第一篇第六章として再錄されている。

(37) R.A.スタン前揭書、一四〇頁。

(38) 拙稿「性格と企圖」六頁。

(39) 『史學雜誌』第八八編第五號、回顧と展望、一九七九年、二五九頁。郢成の語は本論文中にもしばしば人名に附隨して使われており、稱號と考えるのが妥當である。

(40) 拙稿「性格と企圖」二四頁。

(41) 拙稿「西夏建國と宗哥族の動向（以下、宗哥族の動向と略稱）」『中村治兵衛先生古稀記念東洋史論叢』刀水書房、一九八六年、一〇八頁。

(42) 宋會要唃厮囉皇祐五年十二月の條に、磨氈角に對する賜與を記したなかで「蕃官李郢成」という人物が注目される。おそらく彼は磨氈角母子を宗哥城に招聘した李巴沁であったのではないか。郢成のタイトルは李氏に繼承されていたことを示す記事である。

(43) 拙稿「性格と企圖」五頁。

(44) 拙稿「宗哥族の動向」第二節。

(45) 涑水紀聞卷十二に「邈州（川）首領唃斯羅に三子あり。摩戩、轄戩、董戩と曰う。董戩尤も桀黠にして二兄を殺し、而してその衆を幷す。」と記している。

(46) 宋史吐蕃傳に從う。

(47) 長編卷一八七嘉祐三年五月壬午の條參照。

(48) 長編卷一九七嘉祐七年八月癸未の條參照。

(49) 榎前揭論文。

(50) 同右、一一〇頁以降參照。

(51) 同右。

(52) 同右、一一六頁以降參照。

(53) 宋史卷四六四列傳第二二三高遵裕傳に從う。

(54) 榎前揭論文一四二頁參照。

(55) 同右。

(56) 劉運新修、民國八年鉛印本（中國方志叢書、西部地方第二四號）。

(57) 楊應琚撰『西寧府新志』乾隆一二年序刊本、卷一五祠祀志寺觀にもほぼ同文を載せる。

(58) 長編卷二七七熙寧九年九月壬申の條。

(59) 長編卷三四九元豐七年十月癸巳の條。

(60) 本論文中に引用する青唐錄に關しては、拙稿「宋代青唐族に關する史料について」『中央大學大學院論究』第五號、一九七三年、のなかに記載した校勘文による。

(61) スタン前揭書一四三頁。

(62) 宋史卷四六二列傳第二二一智緣傳には彼を「經略大師」と稱したとし、三朝名臣言行錄范祖禹の項には「安撫大師」と呼ばれていたことを記している。

(63) 榎前揭論文一一二頁。

(64) 『東洋學報』第四六卷第四號、一九六四年。なお引用は本文中に頁數で示した。

(65) 同右、七二頁、註二三。

(66) 周振鶴著、(史地小叢書)、商務印書館、民國二七年。
(67) 同右、一八一頁以降。
(68) 周希武著、商務印書館、民國九年。
(69) 山口瑞鳳「チベット佛教史略説」、「カダム派の典籍と教義」『東洋學術研究』第二一巻第二號、一九八二年、參照。
(70) スタン前掲書、六六頁。
(71) 隴右金石錄卷三、宋上。
(72) 長編卷二二六熙寧四年八月辛酉の條。
(73) 長編卷五一一元符二年六月の條末尾。
(74) 長編卷五一六元符二年閏九月辛卯の條、宋會要吐蕃同年條。
(75) 宋會要吐蕃建中靖國元年の條。
(76) 郭朝佐、王全臣等撰、康熙四六年刊本。
(77) 同書、一七五頁。
(78) 拙稿「宗哥族の動向」一〇五頁。
(79) 同右、第三節。
(80) 長編卷一三四慶曆元年十一月戊申の條。
(81) 長編卷一三八慶曆二年十二月乙巳の條。
(82) 王韶が度僧牒を要求してから二六年後のことであるが、長編卷五一六元符二年閏九月庚辰の條に、

> 熙河奏すらく、「空名宣劄各々一百五十、紫衣師號牒一百を降し、以て新羌を待たんことを乞う」と。これに從う。

とあり、北宋末期に至ってもこの政策が遵守されていたことがわかる。

to trust more safely in the latter, because inscriptions being messages to their contemporaries, kings could not indulge in any exaggeration.

Asoka, however fanatic he may sometimes seem to have been, was, so to speak, a sincere apostle of a new religion. Saka princes or satraps were more selfish, because they dedicated shrines or caves mainly to make sure their own and their relatives' happiness. But early Saka princes, Patika and Sudasa, for example, were more pious than later princes, because, as the copper plate inscription of Patika, which was destined to be hidden in the stupa, and the Mathura Lion Capital inscription of Sudasa which was also destined to be concealed under the architrave, show, they had no intention of propagandism: they believed in the world of gods (buddhas). Usavadata, on the other hand, was a frank politician. To him, the Buddhist caves were only media of propaganda of his exploits. In the inscriptions on the wall of the verandah of a Buddhist cave, he boasted of many offerings done for brahmans: he might not have been satisfied, if his inscription could not have been read by visitors. Indian kings after him seem to have followed his example.

TIBETANS AND BUDDHISM IN WESTERN CHINA DURING THE SONG DYNASTY

IWASAKI Tsutomu

During the Northern Song, the term "Tufan" 吐蕃 referred to Tibetans living in western China. These Tibetans accepted as their king a descendant of the ancient Tufan kingdom's royal family, whose name, Rgyal sras 唃厮囉, originally meant "son of the Buddha." For about a century, he and his successors controlled the Amdo region. The Song had assigned them the responsibility of serving as a check on the Xixia 西夏, but as the Xixia became more powerful, Tufan suffered from internal political divisions and grew weaker.

Buddhism profoundly colored the history of western China's Tibetans. Their leaders had a deep faith in the religion, and monasteries flourished in Rgyal sras's capital of Qingtangcheng 青唐城 (the modern Xining 西

寧), which was an important religious center. The government revered monks and even placed Buddhist images in official buildings. Buddhism also flourished among the common people, and Buddhist images were to be found in every village. As the political strength of Rgyal sras's successors steadily declined, monks came to power in the various regions. In the absence of central authority, tribal chieftain's became monks to maintain their position by grasping both political and religious authority. To win over these tonsured chieftains, the Song bestowed on them the purple robe, the title of master 師號 or ordination certificates. They even established monasteries. In these ways, the Song attempted to use religion to control the Tibetan peoples of western China. Moreover, the political position of monks among these Tibetan peoples in the eleventh century became a model for Tibet's later Buddhist Kingdom.